

科学研究費助成事業（基盤研究（S））中間評価

課題番号	22H04928	研究期間	令和4(2022)年度～ 令和8(2026)年度
研究課題名	パレオゲノミクスによるマヤ文明 コパン王朝のダイナミクス解明	研究代表者 (所属・職) (令和6年3月現在)	中村 誠一 (公立小松大学・サステイナブル システム科学研究科・特別招聘教 授)

【令和6(2024)年度 中間評価結果】

評価	評価基準
A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○ A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要であるが、概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれる
B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(研究の概要)</p> <p>本研究は、パレオゲノミクス（古代ゲノム学）をアメリカの古代文明を代表するマヤ文明研究へ初めて本格的に適用し、被葬者「個人」の役割を再定位することによって、王朝の起源、崩壊要因、また血縁関係や社会構造等のダイナミクスを解明しようとするものである。遺跡に埋まっている古人骨からゲノム情報を抽出して全ゲノム解析を行うことにより、従来の考古学研究では把握が困難であった事象に切り込む方法論は、人文学と生命科学が協働する先駆的な研究潮流の開拓と位置付けられる。</p>	
<p>(意見等)</p> <p>本研究の遂行において、世界に先駆けて古典期マヤに生きた人物の全ゲノムデータを生成することに成功したことは、その先駆性ととも国際的なマヤ研究へ大きな貢献をなすと高く評価できる。7個体のサンプルにおいて全ゲノムデータ生成が成功したのみならず、200個体を超えるサンプルについても資料の国外持ち出しに関する制限を乗り越えて輸出許可を取得し、一部は既に核DNA採取も順調に進行している。また、考古学調査による新しい一次資料収集においても、コパン遺跡での新たな王家の石碑を発見するなど、今後の研究発展が大いに期待できる。</p>	